

BCLブームの盛衰

——戦後日本における海外短波放送のリスナー——

井川 充雄

はじめに

1970年代から80年代初めにかけて、日本の中高生の間で、BCLブームがわき上がった。BCLとは、Broadcasting Listening（またはListener）の略称で、直訳すれば放送聴取者となるが、ここでは、海外の放送局が短波（一部は中波）を用いて行っている日本語放送を聞くことを意味する。なかには、日本語放送のみならず、英語をはじめとする外国語による放送や外国のリスナーを想定していない国内向けの放送を聞くリスナーもいた¹⁾。ブームの最盛期には、海外の10数の放送局が日本語放送を行っていた。アマチュア無線と違って、免許もいらず、短波ラジオが1つあれば始められる手軽さがあった。BCLの楽しみ方の1つは、ベリカード集めであった。ベリカードとはVerification Card（受信確認証）のことで、QSLカードと呼ばれることもあった。これは、リスナーが放送局に受信報告書を郵送すると、そのお返しにもらえるハガキ大のカードのことである。

さて、BCLブームは、あまりにも一過性のものであったので、放送史では忘れられた存在と言える。管見の限り、まとまった研究のみられない放送史研究の空白地帯である。

しかし、このリスナーたちは、あとに述べるように、非常に特殊な性格を帯びている一方で、コミュニケーションの一形態として非常に典型的な存在でもあるように思われる。そこで、本稿では、当時、一般の読者を対象として出版された書籍や雑誌などの活字媒体でBCLがどのように表象さ

れてきたかを分析することを通して、BCLブームの経緯をたどり、その上で、そのリスナーたちがどのような人々で、彼らが何を求めて、海外短波放送の受信に夢中になっていったのかについて考察したい。

筆者は、別稿において、1950年代から60年代の「短波マニア」を論じた（井川2014）。これは、本稿が対象とするBCLブームの前史と言えるものであるため、ここで簡単に内容を紹介しておく。

すなわち、第二次世界大戦期には、連合国側、枢軸国側の双方がラジオを使ってプロパガンダを繰り広げたのであるが、戦争が終わった後も、冷戦体制の中で米ソ両国ともますます心理戦を重視するようになったため、短波を用いた国際的なラジオ放送も、プロパガンダの手段として重用された。一方、日本国内では、『無線と実験』（現、『MJ 無線と実験』）のように大正期から続く雑誌に加え、戦後になるといくつもの雑誌が創刊されたり、戦中期に『無線と実験』の編集長を務めた寺澤春潮（本名・通恭）による『太郎のラジオ実験讀本』（牛込書房、1946年）のような単行書も刊行されたりして、ラジオの原理や受信のための技術の紹介が行われた。これらを1つの入り口として、1950年代から60年代にかけて、海外短波放送の聴取が一つの趣味として確立していった。彼らは、電波や電器に関する技術系の雑誌から情報を得て、ラジオ受信機をみずから製作したり、アンテナを張ったりしながら、海外からの電波を受信する「短波マニア」であり、アマチュア無線

やオーディオなどとも相互に行き来したのである。なお、海外からの日本語放送を報じた『朝日新聞』の1957年7月28日の記事は、記事の末尾で、日本向けの海外からの短波放送の受信の仕方やベリカードにも触れている（『朝日新聞』1957年7月28日夕刊）。したがって、この頃にはすでに趣味としての海外短波放送の聴取がある程度の広がりを持っていたことが推測できる。

1 BCLブームの始まり

当初、趣味としての海外短波放送の受信が一部の専門的な知識を持つ「短波マニア」たちによって確立していったのであるが、こうした状況が大きく変わるのは1970年代になってからである。このころになると、趣味としてのBCLはかなり裾野が広がっていた。活字媒体でみれば、1970年代初頭までには、『ラジオと製作』などの無線技術に関する雑誌に、BCLのコーナーが常設されるようになっていった。

そして、1974年は、一つの画期であると言える。その理由の1つは、1974年9月に自由国民社発行の雑誌『深夜放送ファン』が、『ランラジオ』と改題したことである。そして、次の号では、さっそく「BCL入門海外短波放送大作戦」が特集されている。この改題は、深夜放送を聞いていた若者たちがBCLへ興味を持ちだしていたことを象徴していると考えることができる。

さらに同じ1974年には、一般の読者向けのBCL入門書として、三木宮彦著の『短波放送入門』（二見書房、1974年）が出版された。著者・三木宮彦は、1933年4月に東京で生まれ、東京外国語大学スペイン語科を卒業後、NHKに入局し、国際局編成部、国際短波放送北欧向け番組プロデューサーを担当した。BCL関係の著書としては、同書の他にも、『BCL短波放送実戦篇』（二見書房、1976年）を著している。

同書は、10章および付録から構成され、第1章「DXで世界をキャッチ」は、海外短波放送を

聴くことが、「あたらしい世界への冒険！」だと読者の興味をかき立てる。さらに、「最新のロックやポップスもキャッチ！」「キミは『世界の情報通、だ』『冒険野郎の『いのちづな』』『世界じゅうに友だちを！』『DXで世界を聞こう！』とBCLの魅力を語る。つづく第2章の「ベリカード大作戦」では、ベリカードコレクションの楽しさを語り、その上で、第3章「受信レポートを送ろう」、第4章「受信準備OK！—DX受信のポイント5」と、ベリカードを手に入れるための受信レポートの書き方や、受信の方法へと実践的に構成されている。

翌75年には、6月に野口実・赤林隆仁著／ニッポン放送編集による『世界の放送—BCLのすべて』（国際コミュニケーションズ、1975年）、12月には同じく野口実著の『世界のベリカード—BCコレクション』（国際コミュニケーションズ、1975年）などが相次いで刊行された。前者の著者紹介によれば、著者の野口実は、1951年埼玉県生まれ、早稲田大学第一商学部を卒業し、刊行当時は、埼玉県立所沢商業高校教諭であった。赤林隆仁は1950年東京生まれで、早稲田大学大学院理工学研究科修了、専門は大気汚染解析とある。両者とも、雑誌等にもBCL関係の記事を多く執筆しており、また、野口は雑誌に掲載される短波ラジオの広告にも登場している。NHKに勤務していた三木とは違い、二人は趣味としてのBCLの実践者であった。なお、赤林は、1993年にも『世界を聴こう 短波放送の楽しみ方』（コロナ社）という入門書を出している。

さて、前者の『世界の放送—BCLのすべて』は、三部構成となっている、第1部「世界をつかむBCL」では、「BCLといわれるもの」「世界の放送番組」「受信のテクニック」「ベリカードは努力の証明書」「受信レポートの書き方」「BCLの必需品」「トップBCLとなるには」と続く。第2部「電波と受信機」は、「電波の性質」「受信機の選び方」「受信機性能アップのテクニック」「データに強くなるために」という主として技術的な内

容。そして第3部として「BCL資料」が付されている。BCLの魅力として語られることは三木の本と類似している。すなわち、BCLによって、国際感覚を身につけられるということである。その上で、三木の本以上に英語をはじめとする外国語に触れられるというメリットに紙幅を割いている。

この年には、他にも、雑誌『ラジオの製作』の別冊として、『BCLマニュアル だれにも聞ける世界の放送』（電波新聞社、1975年12月）が刊行された。著者は、山田耕嗣である。山田は、1940年12月生まれで、1960年代にはBCLを始め、『ラジオの製作』誌上に多くのBCL関連の記事を連載していた。『BCLマニュアル』は、その後も1978年と1980年にも刊行されたほか、『入門BCLブック』（実業之日本社、1977～82年）にも監修者となるなど、初心者を対象とした入門書を多く出版した。

さらに翌年以降、益本仁雄・長瀬博之『短波に強くなる—海外放送受信学入門・BCL/DXerへのすすめ』（講談社ブルーバックス、1976年）、金子俊夫・小林良夫『海外短波放送を聞こう』（日本放送出版協会、1976年）、大村清・大村知子『BCLの楽しみ方（ワニの豆本）』（ベストセラーズ、1977年）といった、比較的低廉な類似の入門書が続々と刊行された。

これらの入門書で、BCLの魅力として共通することは、BCLは、①未知の外国への興味を満たし、②世界のさまざまな情報を得ることができ、③音楽など外国の文化も知ることができ、④さらに放送局からベリカードをもらうことができる、といったことであった。BCLへの興味関心の高まりは、これらの入門書の刊行を促し、その刊行がさらに多くの人をBCLへと誘う。こうした循環から、1970年代中頃に、一気にBCLブームと呼ばれる急激なBCL人口の増加をもたらした。

ところで、三木の本にも、野口・赤林の本にも共通してみられるのが、短波に関する技術的な説明である。1950～60年代までの「短波マニア」

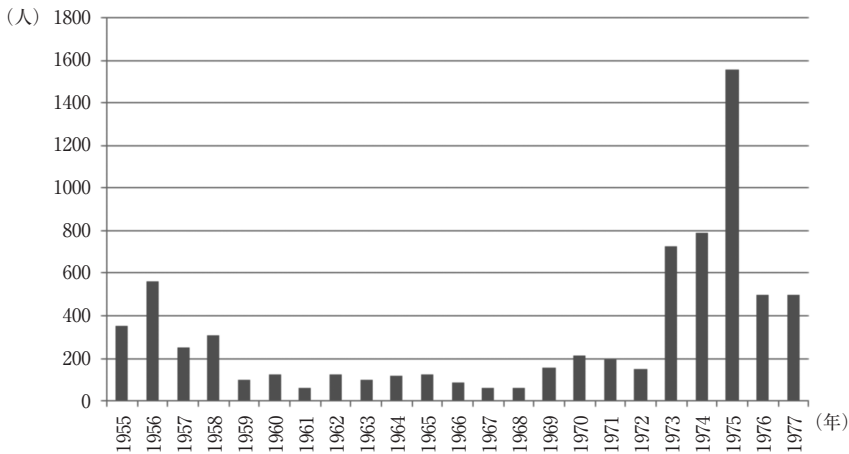
は、自分でラジオやアンテナを改良しながら短波放送をキャッチすること自体に楽しみを見いだしていた。彼らからすれば、BCL初心者であっても、短波の特性やラジオやアンテナの設置方法などを理解すべきだということは自明のことであったのだろう。しかし、高性能のラジオが登場するようになると、必ずしもこうした技術的な知識が必須なものではなくなってくる。したがって、あとで発行される入門書になると、こうした技術的な内容は少なくなっていく。

2 BCLブームの高まり

2.1 BCL人口の急激な増加

入門書の刊行や雑誌記事などに刺激され、1973年頃には、いわゆるBCLブームが到来する。BCL人口全体を把握するのは困難であるが、ここでは、1つの裏付けとして、日本短波クラブ(JSWC)の入会者数の推移を見てみよう。日本短波クラブとは、1952年に創立された老舗のリスナー組織である。当初は、機関誌を英文で作成するなどしていたことから見ても、理工系の専門的な学生の集まりであった。設立時の会員は約20名であったが、その後、海外からも参加もあり、規模が拡大していった（日本短波クラブ50周年記念事業推進委員会編2002）。

この日本短波クラブでは、入会者に対して、通し番号の会員番号を付与している。それに基づいて、その年の入会者数をグラフにしたのがグラフ1である。これを見れば、第一のピークは1955年から58年にかけてであるが、それを上回るブームが1973年から77年にかけて到来したことがわかる。すなわち、第一のピークの1956年は、561名の入会者数であったのに対し、第二のピークの1975年には、その3倍近くの1556名が入会した（日本短波クラブ50周年記念事業推進委員会編2002）。なお、この資料では、1978年以降の入会者数ははっきりとはしないが、その後10年間では、毎年30～40名程度の入会者



グラフ 1 日本短波クラブの新入会員数の推移

出典)『日本短波クラブ創立 50 周年記念誌』日本短波クラブ 50 周年記念事業推進委員会、2002 年、の各年の記載事項より作成。

数ではないかと推測される。なお、ここであげた数値はあくまで入会者の数字で、そのすべてが会員としての活動を続けたのではない。自発的に退会するものもあれば、会費の滞納によって幽霊会員化するものが、かなり多くいたようである。

さらに、BCLの全国組織として、1975年10月1日、日本BCL連盟が設立される(名越・紺野 2011:12)。会長にはロケット開発の研究者で一般にも有名であった糸川英夫が就任した。また会長以外の理事には、NHK理事の橋本忠正、日本民間放送連盟専務理事の磯村幸男、毎日新聞の藤田信勝、電通の小谷正一、それに著述業の名越真之が就任したが、実質的に日本BCL連盟を運営したのは名越であった。名越は1932年、岡山県に生まれ、早稲田大学第一文学部を卒業後、徳間書店に入社した。11年間勤務して退社した後はフリーの著述家として雑誌や本の執筆にあたった。著書に『世界ミステーク旅行』(立風書房、1968年)、『ソ連の真昼と暗黒』(潮文社、1968年)、『私たちはどのように行動すれば美しいか』(PHP研究所、2008年)がある。名越は、1974年にNHKに取材に行ったときに、海外からの日本語放送を知って興味を持ったという(名越・紺

野 2011:4-11)。

日本BCL連盟は、5名のスタッフでスタートしたが、その年の12月8日には雑誌『短波』(1976年1月号)を創刊する。創刊当初は隔月であったが、同年5月の第3号から月刊となった。日本BCL連盟は、このほかにも『DX年鑑』(『短波』別冊、1980~83年)の出版や、会員向けの会報誌『Hz』などを刊行した。こうした1970年代後半から80年代前半にかけて、BCLブームは最高潮に達した。日本BCL連盟の会員数も、1975年の発足当初は300人前後であったが、76年末に3781人、77年末に5102人、78年末に7773人、そして81年には1万人を超えたという(名越・紺野 2011:52-55)。

ちなみに、戦後日本で海外への観光渡航が自由化されたのは1964年からで、1970年頃には、日本交通公社(JTB)の「ルック」、近畿日本ツーリストの「ホリデイ」、日本旅行の「マッハ」という大手旅行会社のパッケージツアーが揃った。そして、1978年には成田空港が開港し、海外旅行が大幅に増加する。むろんこれだけが理由ではないが、BCLブームの背景には、日本人の中に海外への興味が現実のものとして高まっていった

こともあったと言えよう²⁾。

さて、こうしたBCLの爆発的な増加は、ラジオ受信機の需要を喚起する。ラジオを生産する電器メーカーは、相次いで、短波受信性能を高めた新型のラジオを発売する。ソニーが、1972年、ソニーがスカイセンサー・シリーズの先鞭となるスカイセンサー5500を発売すれば、翌年には松下（現、パナソニック）がターガーを出して対抗した。そして、1975年には、今でも愛好家の中では伝説の名機とされるソニー・スカイセンサー5900が登場し、他の電器メーカーも含め、短波ラジオの開発・販売競争が激化した。日刊工業新聞社発行の『電子技術』という専門誌にも、1976年6月号のグラビアで「BCL用ラジオ、ただいまフル生産」という記事が見られる。

性能がよく、操作性の高いラジオ受信機は、いっそうBCLブームに拍車をかけた。なぜなら、BCLへの新規参入が容易になったからである。それまでは、自分でラジオを組み立てたり、アンテナを張ったりする苦勞が伴っていた。入門書にも必ず、短波の特性や技術的な内容が掲載されていたのはそのためである。しかし、高性能のラジオがあれば、そうした苦勞はかなり軽減される。その結果、BCLは、小学校高学年から高校生くらいまでのティーンエイジャーへと急速に拡大し、低年齢化を引き起こした。

2.2 BCLブームの過熱

一般に、1970年代のBCLブームを担ったのは中高生と言われる。雑誌『短波』には「BCL雑談室 みんなで語ろう読者の広場」という投稿欄が設けられていた。投稿には本名が付されており、顔写真が掲載されているものも多いので、おおむね性別を判断できる。また、内容から、年齢や学年を判断できるものも多い。それから判断すると、投稿者は、小学校高学年から高校生間の男子が圧倒的に多い。これは、ほぼブームの担い手を反映したものと言えらるだろう。

この投稿欄には、投稿者のさまざまな思いが語

られるとともに、時には投稿者同士の議論に発展する場合もあり、たいへん興味深い。ここでは、女性からの投稿を1つ紹介することにしたい。それは、「女の子だってBCLやるわよ」というタイトルの投稿である。

BCLを始めてもう一年くらいになるけど、ワタシの他にも女の子のBCL仲間がいるんですよ！

女の子がBCLをするのがどうしてナマイキなんですか？「短波」のDXレポートなどにも男の人の名前しかないし、他の雑誌などでも同じです。だけどBCLは男の人のものだけではないんです。

「全国の子供BCLよ、立ちあがろう！」
（『短波』1977年3月号：76）³⁾

こうした投稿が掲載されること自体、女性のBCLが珍しかったことを物語っている。したがって、BCLブームの担い手が、圧倒的に男性であり、次第に女性にも拡大していったとみることができる⁴⁾。

前述のように、趣味としてのBCLの楽しみの一つはベリカード収集であった。前述の野口実『世界のベリカード—BCコレクション』は、タイトル通り、世界の各放送局の発行するベリカードを紹介した著書である。読者たちはこうした本を見ることで、収集欲を高めていったのであろう。しかし、それが行き過ぎると、さまざまな問題を引き起こすようになる。同年の野口実・赤林隆仁著／ニッポン放送編『世界の放送—BCLのすべて』の「まえがき」にも「実は、今、困った現象が起きているようです。それは、放送を聞くのを、ただ、カード集め的手段と考える風潮です。その結果は、放送局の機能がおかしくなりそうなところまで進んだ例さえ出てきました。健全な常識で考えれば、すぐわかるようなことが、わからないのでは、これからの国際人として、とうてい通用しないでしょう」（野口・赤林 1975：まえがき）

という一節がある。このまえがきは、日本短波クラブの小林良夫によるものであるが、BCLブームの高まりは、ペリカード収集の過熱とも言える状況をもたらしていた。

こうした状況にあつて、『短波』誌も創刊号から「ペリカードと受信報告」という特集を組んでいる。例えば、創刊号では、野口実が「考え直そうペリカードの意義」として、日本からの虚偽の受信レポートが海外の放送局に送られている事例をいくつもあげた上で、「ペリカード集めのマナー」について次のように述べている。

日本人BCLが、海外の放送局からペリカード・アニマルとかVCL (Verification Card Collecting Listener=ペリカードだけを集める聴取者) といわれなくするためのにはどうしたらよいか、BCLひとりひとりが考えなければなりません。

「物乞いレポート」「水増しレポート」「ゴマスリ・レポート」などのでたらめな受信報告はもちろんさげなければなりません。ペリカード集めだけが、海外放送の楽しみという考え方を捨てざることも必要です。このためには、なぜ海外放送というものが行なわれているのか根本から考えてみることを勧めます。

ペリカード集めのマナーは、直接受信報告の書き方とも関係してくるので、次回にも詳しくお話ししますが、要は相手の立場にたつて受信報告を書くということにほかなりません。言いかえれば、正確に、詳細に、そして迅速という3本の柱が受信報告には必要なのです。ペリカードはBCLの勲章だとよくいわれますが、ペリカードだけがBCLのすべてではないということを頭に浮かべて海外放送を楽しみたいものです。(野口 1976: 11)

野口は、5回にわたって連載をして、過熱気味のペリカード収集を諫めている。実際、世界的なBCLブームの高まりによって、ペリカード

を目的としたリスナー・メールがかなり増加していたようである。アメリカのVOA (Voice of America) の場合も、その処理が追いつかないという状況が起こっていた。すでに1966年には、リスナー・メールに対する対応についての改善策が、VOAを所管するUSIA (United States Information Agency, アメリカ情報庁) 内で検討されている。その報告書によると、1965年に世界各地からワシントンDCのVOA本部によせられたリスナー・メールは81,758通、各地の支部によせられたものは102,070通の計183,828通であった。しかし、ワシントンによせられたもののうち処理できたのは、49.6%にすぎず、残りは手つかずのままであった(井川 2009)。

しかし、こうした野口らベテランからの警鐘にもかかわらず、ブームが高まれば高まるほど、ペリカードコレクションは過熱し、ペリカードめあての受信報告が横行してしまう。それどころか、ペリカード収集には、競争原理が働く。すこしでも多くのカードを集めようとするれば、他人よりも多くの時間と手間をかけなければならない。しかも、ペリカードがBCLの「勲章」であるならば、それには記号としての差異性が作用する。他人が持っているようなありふれたペリカードでは競争に勝てない。そのため、より上級のBCLになればなるほど、より珍しい放送局、例えば、日本語放送以外の放送局や各国の国内向けの放送局の受信へとむかうことになる。また、リスナーからのメールが殺到し放送局がそれに対処できないとなれば、ますますペリカードは希少性を帯びてくる。そのため、でたらめな受信報告の送付といったマナーからの逸脱が横行し、そのたびにマナーの喚起が繰り返されたのである。

2.3 先行する「短波マニア」からの反発とBCLの問い直し

ところで、BCLに中高生などが大量に参入したことを、旧世代のリスナーたちは、単純に歓迎していたわけではない。ペリカードの集めのマ

ナーに関する苦言もそうであるが、新規参入者に対しての反発は少なくなかった。

『短波』誌上にも、たびたびそうした記事が登場した。例えば、塚本直幸は連載の最終回の「みたびDXとは何か」のなかで、ある人に「BCLは数年前にやめました。今はずっとDXをやっています」と言われたという経験を紹介した上で、BCLとは違う概念としてDXを論じている。そして、「DXの持つ特徴点」として、①DXはスポーツ的である、②DXは科学的である、③DXにはルールとフェアな精神が必要である、④DXは知的な大人の趣味である、⑤DXはグローバルな趣味である、の5つがあるとする（塚本 1979：108-109）。ここでの主張は、BCLを中高生の低レベルな趣味とした上で、DXをそれより高次に置こうとするものと解釈できよう。

1979年7月号に掲載された小泉大一の「BCLって何だろう？」も、DXは「遠方にある放送局、つまり珍局探しをすることがDXとかDXingとかいわれるもの」とした上で、DXはBCLの一部分だとする。そして、BCLのあり方については、「何人もが同じ受信機を使い、同じアンテナを張り、同じアンテナカップラーを使い、同じ放送を聞き、ベリカードだ、DXだと騒ぎ立てているのをみると悲しくさえなります」として、各人がそれぞれの楽しみを見つけるべきだと述べる（小泉 1979：118-121）。

また、『短波』の継続的なライターであった長瀬博之は、1980年1月号で「1980年代のDXを考える」として、80年代のBCLの課題として、①書を捨てよ、街に出よう！、②専門分野を広げよう、③ハードウェアに強くなろう！、④独自のDXingの方向を開拓しよう！の4点をあげている。このうち、②は言葉や音楽に強くなるということ、③はメーカー製のラジオに依存している状況を批判したもので、④とあわせて考えれば、小泉と同様に皆が同じラジオで同じ放送を聞いているという状況からの脱却を展望したものであった（長瀬 1980：34-35）。

3つの記事を例にあげたが、ここに共通するのは、余りにも過熱した「BCLブーム」の最中であって、低年齢化が進んだBCLの現況への反発やBCLのあり方そのものの問い直しである。とくに、BCLが世間一般からは子どもの遊びと受け止められがちな状況であって、DXという表現を用いてBCLとの違いを強調しているのである。

実際、このあとの『短波』を見ると、「上級DXerへのステップ」といった特集が組まれたり、航空無線や地下放送局といったより専門的な知識がなければ受信できないようなマニアックな記事が表れるようになる。それは、BCLの楽しみの一つの拡大と言えるかもしれないが、その背後には、BCLの「低年齢化」や「大衆化」への反発があったのだと思われる。

3 BCLブームの衰退

前節で、中高生の特に男子を中心にBCLブームが爆発的に起こったことを示したが、それはBCLブームの担い手がそれに限定されるということではない。1972年から76年にかけて、いわゆる男性向け週刊誌にも、何本かBCL関連の記事が出ている。

例えば、『平凡パンチ』にも、1973年10月29日号に「同じ深夜放送なら海外短波を！ エキジチズム&ホット情報プラス音楽で人気」という記事が掲載されているが、これはBCLが中高生でブームとなっているというスタンスの記事であった。ところが、同誌の1975年4月14日号になると、「パンチ・オーディオ作戦番外編BCLのすべて」という8ページの特集が組まれている。これは、「BCLガイド・世界の放送局」「ベリカードを集めよう」「BCL用ラジオBEST9」と、読者自身をBCLに誘う内容となっている。したがって、その読者層と考えられる20代、30代の男性にもBCLが、ある程度、広まっていたことと推測される。

また、『週刊プレイボーイ』も、「海外から

の日本語放送を聞こう 座ったままで世界をキャッチ」(1972年11月28日号)をはじめ、「NOWな男の情報源 BCLに全員注目!世界の電波をつかまえろ!」(1975年7月1日号)、「NATIONAL COUGAR 2200vsSONYスカイセンサー5900」(1976年12月7日号)など、繰り返し、BCLに関する特集を組んでいる。

しかし、このあと、男性向け週刊誌からはBCL関係の記事は消える。BCLは大人たちには、一般的な趣味として定着しなかったのである。それに代わって浮上するのは、より実利的な海外短波放送の利用法、すなわち、英語学習のための海外放送聴取である。1977年には、長崎玄弘『FEN、BCL英語の徹底攻略』(朝日ソノラマ、1977年6月)と三枝幸夫『VOAのきき方』(ジャパントイムズ、1977年10月)が立て続けに刊行され、海外放送を聞くことで「生きた」英語をヒアリングするノウハウが伝授される。なお、その前年の1976年には、渡辺千秋『FENのきき方』(ジャパントイムズ、1976年)が刊行されている。終戦直後から、こうしたラジオ放送を用いた英語学習は個別的には行われていたのだが、この頃になって、そうした学習法が英語教育の一つの手段として確立したのだと思われる。その後も、類似の英語学習本は定期的に刊行され、さらにはカセットテープやCDを付録につけた図書も登場し、今日に至るのである。

BCLブーム自体は、その後、急速に衰退へと向かった。経営の不振を体現するかのようになり、1980年1月号では総ページが168ページに達していた雑誌『短波』も、1982年1月号以降は、定価は400円のままで、総ページが100ページに減少する。そして、ついに1983年7月、8巻7号で休刊してしまう。翌月には、日本BCL連盟そのものが解散することとなった⁵⁾。この頃にはBCLブームは完全に下火になっていた。

BCLブーム衰退の理由を1つに還元することはできないが、外在的な要因としては、1980年代にはマイコンブームが起り、メカ好きの興味

を一気に惹きつけたことや、1983年7月に、初代のファミリーコンピュータが任天堂より発売され、より大衆的なゲームブームが巻き起こったことがあげられよう。実際、『短波』誌にも、例えば、1982年11月号に「BCL的マイコンの活用法と実例」が特集されているが、BCLとマイコンは親和性があったのだと思われる。しかし、そのことがBCLからマイコンへの離脱者を生むとともに、新たな中高生を獲得できず、ブームの終焉を迎えることになったのだと考えられる。

おわりに

以上、BCLブームの盛衰をたどってきたが、ここで以下の4点を指摘することができよう。

第一に、BCLのリリスナーの特性についてである。一般的に、戦後のラジオによる国際放送は、その国の文化を紹介する「広報外交」の一環として実施された。それが敵対する陣営に対してであればプロパガンダ色が強くなるが、そうでなくても、その国に対する親近感を高め、友好的な世論を形成することがその目的であった。しかし、受け手のほうは、当初は、外国への興味や関心、憧れなどをきっかけとしてはじめてにせよ、未知の電波、受信しにくい放送の受信そのものと、その結果としてのペリカード集めのほうに傾斜しがちであった。すなわち、送り手と受け手には、国際放送の送受信の意図や動機に関してかなりのずれが生じていると言える。古典的なマス・コミュニケーションのモデルでは、送り手が発したメッセージがその通り受け手に伝わり、それが何かしらの効果をもたらすことが想定されているのであるが、BCLの場合、受け手の能動性がかなり強く、そのために送り手の意図とは違ったところに受け手の意図が存在したのである。そもそも、日本では中波放送が発達し、1950年代以降はNHK以外に民放も複数存在する。また、テレビ放送も東京で1952年に開始され、全国へ広がっていった。そうしたメディア状況にもかかわらず、あえ

て受信に困難さを伴う海外からの短波放送を聞くのは、そこに受け手の強い意欲がなければならぬ。そして、それは送り手の思惑から大きくはずれたものとなる。したがって、従来の「広報外交」に関する研究では、どうしても発信側の資料に依拠しがちであり、そのために送り手側の視座にとらわれがちであるが、受け手ははるかに自由に振る舞っていたのである。冷戦期の国際放送の実態を明らかにするには、それを考慮に入れることが重要であろう。

第二に、BCLにとってのベリカードの意義についてである。ラジオは、点在する不特定多数のリスナーによって聴取されるという性質を持つ。だからこそ、国際的なプロパガンダにラジオは最適であるのではあるが、送り手からすれば、新聞やテレビ、映画といった他のマス・メディア以上に受け手の顔が見えにくい媒体である。したがって、本当に受信されているかを確認するには、受信報告書を送るという形態でリスナーからの協力が必要になる。その見返りとして、あるいはその動機付けとしてベリカードを発行する。

受け手からすれば、まずは、自分のラジオで遠い外国からの電波がキャッチできて聞こえるということ自体が楽しかったのだと思われる。しかも、通常の国内ラジオでは一方的になりやすいが、BCLの場合は受信レポートの郵送、ベリカードの返信の一連のプロセスによって、未知の送り手との間に双方向のコミュニケーションが成立する。そのこと自体がリスナーには喜びだったのだろう。これは、例えば、ファクシミリや電子メールでも、初めて使ったときには相手からのメッセージが届き、自分のメッセージが送れたということ自体が感動や喜びをもたらしたのと同様に、メディアを使って他者とつながることそのものに原初的なコミュニケーションの充足感があったのだと考えられる。したがって、「短波マニア」からすれば、ベリカードは自分が創意工夫をこらしたラジオが微弱な電波をキャッチし、コミュニケーションが成立したことの証明としての意味を持っ

ていた。そうした基本的な姿勢は、BCLブームにも受け継がれる。1970年代の各種の入門書や雑誌記事は、BCLの魅力として容易に海外の情報や文化に触れることができることをあげていたが、彼らが実際にどれだけ、海外の情報や文化を受容したのかはわからない。むしろ、実態としてはベリカード収集が主の場合も多かったと思われる。それは、「短波マニア」たちが作り上げたベリカード集めの構図を、極端なまでに増幅したものであったと言える。

第三に、これらと関連するが、第一世代の「短波マニア」と、それに続くBCLブームへの大量の参入者とのアンビバレントな関係についてである。先行する世代は、当然ながら経験と知識において勝っており、新規の参入者たちに対しては指導的な立場に立つことができた。また、その中から、雑誌に紹介記事を書いたり、単行本を刊行したりして、次世代の参入を積極的に促すものも現れていった。しかしその一方で、ベリカード集めが過熱したり、周囲からBCLが子どもの遊びと思われたりすることは心外であり、『短波』誌上などでBCLのマナーやあり方を問わずにはいられなかった。

本稿で紹介したBCLとDXの差別化の議論は、それを象徴するものであったと言えよう。つまり、ブームに乗って参入してきた圧倒的多数の中高生がBCL=ベリカード集めと認識し、それに狂奔していったのに対して、古くからのリスナーは、みずからラジオを組み立て、アンテナを張り、その結果として遠方の放送局の電波を受信できた証としてベリカードを手にするという原点を主張したのである。ただ、中高生がベリカード集めに熱狂するようになったのには、古い世代のリスナーが雑誌等で珍しいベリカードを紹介し、それを煽った面も無視することができない。いずれにせよ、専門的な知識や長い経験を有するリスナーからは、大量の新規参入者が一過性のブームを巻き起こしたことは、彼らのある種の優越感をくすぐるとともに、BCLが中高生の遊びに転化してしまった

という苦々しさの両面があったのだと考えられる。

そして第四に、本稿ではあまり掘り下げることはできなかったが、ラジオメーカーの商品戦略がBCLブームの背後にあったことは見逃せない。高性能のラジオが販売されることにより、専門的な知識があまりなくてもBCLを始めることが容易になる。メーカー側からすれば、短波ラジオの需要の高まりは、より高性能で操作しやすいラジオの開発に向かうことになる。したがって、上述のようなBCLブームの「低年齢化」「大衆化」を後押しする結果となるのである。

実際、当時の短波ラジオの広告には、BCL関係の記事のライターもたびたび登場しているが、メーカー側は彼らを利用し、子どもを消費文化の主役に押し立てることで、売上を伸ばしていった。このような短波ラジオの生産や普及状況とBCLブームの関係については、たいへん興味深い⁶⁾。これについては今後の課題としたい。

註

- 1) BCLという言い方自体が、歴史的に成立したもので、「遠距離」を意味するDistanceから「DX」（あるいは、それを行う人として「DXer」）、あるいは短波放送聴取者（Short Wave Listener）の頭文字を取って「SWL」とも呼ばれた。これらは同意語として用いられる場合が多かったが、あえて区別する用法もある。それについては、後述する。
- 2) 戦後日本の「海外旅行」の変遷については、例えば、山口（2010）を参照。
- 3) さらにこれに賛同する投稿が、『短波』1977年5月号、84ページにも掲載されている。
- 4) こうした趣味におけるジェンダーの違いについては、宮台・辻・岡井（2009）を参照。
- 5) なお、このあと1984年3月に、日本BCL連盟は任意団体として復活し、名越が会長に就任した。また、『My Wave』と題する情報誌が二〇〇六年まで発行された（名越・紺野 2011：35-51）。
- 6) 日本のラジオの黎明期におけるラジオメーカーの役割について論じたものとしては、山口（2006）

などがある。

【参考文献】

- 井川充雄，2009，「冷戦期におけるVOAのリスナー調査 —日本語放送を例に—」『応用社会学研究』立教大学社会学部，51号
- 井川充雄，2014「戦後日本における海外短波放送のリスナー」『大衆文化』立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター，11号
- 小泉大一，1979，「BCLって何だろう？」『短波』日本BCL連盟，1979年7月号
- 宮台真司・辻泉・岡井崇之，2009，『「男らしさ」の快楽』勁草書房
- 水越伸，1993，『メディアの生成 アメリカ・ラジオの動態史』同文館出版
- 長瀬博之，1980，「1980年代のDXを考える」『短波』日本BCL連盟，1980年1月号
- 名越眞之・紺野敦，2011，『「日本BCL連盟」の記録』名越眞之
- 日本短波クラブ50周年記念事業推進委員会編，2002，『日本短波クラブ創立50周年記念誌』日本短波クラブ50周年記念事業推進委員会
- 野口実・赤林隆仁著／ニッポン放送編，1975，『世界の放送—BCLのすべて』国際コミュニケーションズ
- 野口実，1976，「ベリカードと受信報告 考え直そうベリカードの意義」『短波』創刊号（1976年1月）日本BCL連盟
- ポスカンザー，デボラ・R，1996，「無線マニアからオーディエンスへ」水越伸責任編集『二〇世紀のメディア 1 エレクトリック・メディアの近代』ジャストシステム
- 塚本直幸，1979，「みたびDXとは何か」『短波』日本BCL連盟，1979年4月号
- 山口誠，2006，「放送をつくる「第三組織」—松下電器製作所と「耳」の開発—」『メディア史研究』第20号
- 山口誠，2010，『ニッポンの海外旅行：若者と観光メディアの50年史』筑摩書房
- 吉見俊哉，1995，『「声」の資本主義 電話・ラジオ・

蓄音機の社会史』講談社

助成を受けたものです。

(付記)

本研究は、JSPS 科研費 26380708、および 15H03314 の